

戦国期における勅願寺由緒の形成と展開

——美濃国立政寺を事例に——

桐 田 貴 史

はじめに

勅願寺に関して、はじめて本格的検討を行ったのは、佐野恵作氏である。^①佐野氏は「御由緒寺院」「皇室御縁故寺院」などといった分類を行い、多数の勅願寺や門跡寺院の検出を試みた。ついで辻善之助氏は、各宗派の寺院の事績を紹介する中で勅願寺を取り上げ、その宗派史的意義等に注目し、^②また、平岡定海氏は、地方有力寺院が朝廷・幕府・国人領主といったさまざまな階層から祈願寺の指定を受けることで、自らの権益を守ろうとしていたことを明らかにしている。^③

その後三十数年間、中世の勅願寺にスポットが当てられることはなかったが、一九八九年、昭和天皇の崩御がその研究状況を一変させた。天皇に関する研究が俄かに活況を呈し、^④その中で勅願寺も再び扱われることとなった。その嚆矢となったのが、脇田晴子氏による「戦国期における天皇權威の浮上」の発表であった。^⑤脇田氏はその論考の中で戦国期に勅願寺が増加傾向にあることを指摘し、「天皇による寺社編成」の一環としてこれを論じた。また、従来明確な定義づけのないままに使用されてきた室町・戦国期の勅願寺に、「寺側の申請に基づいて勅命によって認可され、鎮護国家・玉体安穩を祈願する寺」との定義を与え、その後の勅願寺研究の基礎を形作った。また、勅

願寺と地域権力との関係にも言及し、地方寺院の勅願寺化の背景に、地域権力があつたことを示唆した。これら脇田氏の一連の指摘は、渡邊大門氏も指摘するように、その後の勅願寺研究の基礎となった。

脇田氏の研究を核として、その後の勅願寺研究は大きく二つの視点に分かれることとなる。一つが、富田正弘氏・大喜直彦氏らの「天皇による編成」を強調する視点⁽⁷⁾。もう一つが、今谷明氏・伊藤克己氏の勅願寺と地域権力との関係を重視する視点である⁽⁸⁾。なかでも伊藤氏は広範な事例から、中世後期の勅願寺が「国家制度的なレベルにおいて寺院の公と私を判断する基準となっていた」とし、大名権力はその有縁寺院を勅願寺化させることで、公権力化を図つたと指摘した。

右のように戦国期の勅願寺研究は、朝廷権威の問題、大名権力論などを中心に進展してきた。しかし、個別事例研究の蓄積がないまま、議論の普遍化が急がれた感が否めない。

また伊藤氏は、末寺が勅願寺や紫衣着用の勅許を獲得することにより、本寺からの独立が達成されたとしたが、小森崇弘氏が指摘しているように⁽⁹⁾、脇田氏、今谷氏らと同様、勅裁がもたらす「効果」を自明視しているように思われる。勅願寺となることが寺格の形成にどのような影響を与えたのか、また与えなかったのか。これは論旨の文言のみならず、寺格主張のテクス

ト等からも検討しなければならない問題であろう。

そこで本稿では、あくまでも個別事例の提示にこだわり、検討の対象を敢えて一ヶ寺に限定する。今回検討する立政寺は、美濃国市橋荘（二条家領）に所在する浄土宗西山派寺院であり、後述するように延徳二年（一四九〇）、勅願寺となっている。また同寺には、寺伝文書を中心に編纂された縁起が存在することから、先述の問題を検討する素材として適切であると思われる。以下、立政寺を中心に当該期における勅願寺主張の形成・展開過程の一事例を提示したい。

第一章 勅願寺論旨の獲得に関する基礎的検討

本章では、立政寺が延徳二年に獲得した論旨に関して、その獲得過程、及びその際に同寺から提出された文書等について基礎的検討を行い、その後の寺格形成に与えた影響等について述べる。

第一節 勅願寺論旨の獲得

次に掲げるのは、立政寺の勅願寺申請を天皇に取り次いだ三条西実隆の日記である。

【史料1】『実隆公記』延徳二年十二月九日条（以下、引用史料への傍線・記号・注記等は全て筆者による。）

九日辰丙（中略）、抑濃州市橋庄立政寺御祈願所勅裁事、

江南院所望、今日以書狀申入之、即勅許、（中略）、彼勅裁

事（正徳）頭中將則書遣之、旧案并今度草等続左、

a. 可被致御祈禱由、撰政殿御氣色所候也、仍執達如件、

永徳二年八月十六日 右少弁家房（本任）

智通上人御房

b. 美濃国市橋庄内立政寺、為淨土宗、被致御祈禱精誠之由、

殿下御氣色所候也、仍執達如件、

應永五年十二月十七日 後藤左京權大夫判

智通上人

c. 美濃国市橋庄立政寺事、令弘通淨土宗、宜致御祈禱之由、

天氣所候也、悉之、以狀、

延徳二年十二月九日 右中將判（正徳）

護海上人

件寺系譜如此云々、仍続加之、

西山善恵上人西山流根本

淨音上人西山弟子、西谷義是也、

了音上人西谷弟子也、

義称大徳

智円律師武州大串談義所、今ハ断絶也、

智通上人立政寺開山也、

戦国期における勅願寺由緒の形成と展開（桐田）

開山智通以來十代也、
当住護海

まず、その申請・発給過程について確認しておく。「江南院所望」とあるように、立政寺の勅願寺申請を実隆に取り次いだのは、以前から実隆と交流のあった甘露寺家出身の禪僧で当時

美濃国に滞在していた江南院龍霄であつた。¹¹ 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

寺申請に関しては、高橋慎一朗氏が立政寺↓守護代斎藤氏↓江南院龍霄↓三条西実隆↓朝廷という流れを想定している。

次に、獲得されたcの繪旨の位置づけについて検討する。まず、その内容を確認しておく。cの繪旨は立政寺に淨土宗の弘通、祈禱を命じており、勅願寺云々といった文言は確認できないが、実隆の言う「御祈願所勅裁」の結果として発給されたものであるから、文言の如何に関わらず、同寺を勅願寺とする繪旨＝勅願寺繪旨と考えてよからう。

さて、cの発給に際しては「旧案」として、a・bの文書が挙げられているが、その発給元である二条家に案文を尋ねた形跡が見られないことから、これらの文書は立政寺により用意されたと考えるべきであろう。次に挙げるように、戦国期の勅願寺繪旨申請には、寺家側より先例となる繪旨が用意されるケースが少なからず存在する。

【史料2】「宣秀卿御教書案」〔符案〕一一八―一九頁

城東寺・繪旨事

当寺為

勅願寺之由、被聞食畢、殊可被專天下安泰・朝廷

繁栄之御祈祷之由、天氣所候也、仍執達如件、

文明十七年七月廿六日 權右少弁判

以前案、正文一見、

当寺為

勅願寺、可被專祈祷者、依天氣所候也、仍執達如件、

康暦元年十二月五日 左少弁判

城東寺別当律師御房

右繪旨事、民部卿申也、女房奉書在之、民部卿息僧主□□

ここでは先例となる繪旨の正文が奉者により一見された上、新たな繪旨が発給されている。立政寺の事例におけるa・bの文書の内、bについては寺伝文書中に正文・写ともに確認できないが、恐らく延徳年間にはその正文が存在したと考えられる。ともかく、勅願寺繪旨の発給に際して、先例文書が用意される必要があったことは、注意しておきたい。

a・bの文言がcの繪旨に与えた影響についてもここで触れておきたい。【史料2】の例からうかがえるように、新たに発給される繪旨は先例文書の影響を受ける。【史料1】の場合も同様で、主としてbの文言が参照された結果、浄土宗の弘通を命じる文言がcに盛り込まれたと言える。以上見てきたように、当該期の勅願寺繪旨の文言は申請者が提出した先例文書に規定された。

しかし、ここで一つの疑問が生じる。繪旨申請の際の「旧案」に、なぜa・bのような撰家御教書が位置づけられ得るのであろうか。そのことを考えるため、正文が立政寺に伝来するaの二条良基家御教書を中心に検討したい（立政寺文書11『岐阜県史料編 古代・中世1』。以下、文書番号のみを明記する）。史料によれば、永徳二年（一三八二）以降の二条良基家永遵嗣氏によれば、永徳二年（一三八二）以降の二条良基家御教書は「繪旨」と呼ばれ、勅裁としての機能を有したという。家永氏が例として挙げた御教書は、奉者がaと同じく清閑寺家房であり、書き止め文言も酷似している。¹⁸ aの文書は朝廷側にとって、繪旨と同様、もしくはそれに準じる文書として位置づけられ得たと言えよう。

では、aを「旧案」として提出してきた寺側は、いかなる認識を有していたのだろうか。宇高良哲氏が指摘しているように、立政寺にはaの受給を「立政寺開山智通能化、於上人号、從月輪殿依被成申」とする、明徳五年（一三九四）の年紀を有する二条家からの渡状が伝来しており、受給直後からaを、上人号宣下の際に発給された文書として認識している。つまり、朝廷・立政寺の双方が当初からaの撰家御教書を繪旨同様の文書と見做していたことになる。ここに、a・bが「旧案」たり得る余地があった。

第二節 立政寺による血脈の提出

cの綸旨の獲得に際しては、dの血脈も併せて提出されている。戦国期、勅願寺綸旨の申請に際して血脈が寺家側から提出されることは、管見の限りでは確認できない。いずれにしても、極めて特異な例と言えよう。本節では、その背景について検討する。

まずdの内容を確認しておく。初代を善恵上人、すなわち西山派の祖である証空とし、その弟子にして西谷流の祖となった浄音の一流を汲むものとして、立政寺開山の智通を位置づけている。したがって、dは立政寺が浄土宗西山派中における同寺の位置づけを朝廷に示したものであるが、ではなぜ、かかる血脈を提出する必要があったのであろうか。

当該期、西山派諸流の中で隆盛を極めていたのは、証空の建立にかかり、彼の墓所でもあった三鈷寺率いる本山義であった⁽²¹⁾。殊に同寺住持の善空は、後土御門天皇の帰依を受け、文明十一年（一四七九）には天皇の菩提所である般舟三昧院の建立に関わり、その住持を兼帯したことからもうかがえるように、天皇追善仏事にも深く関わるようになっていた。⁽²²⁾ また三鈷寺では、既に文明九年（一四七七）、末寺への香衣着用を許可する制度が構築され、それが綸旨により承認されていた。⁽²³⁾ また、本件に関して勅許獲得という重要な役割を演じた三条西実隆も、

戦国期における勅願寺由緒の形成と展開（桐田）

善空に深く帰依していた。⁽²⁴⁾ こうした善空を中心とした本山義の台頭もあってか、戦国期、多くの西山派寺院が勅願寺となっている（表①参照）。立政寺による血脈の提出は、かかる西山派諸寺院の動向を意識してなされたものと考えられる。立政寺は当時朝廷内で大きな影響力を有した西山派内における位置づけを示すことで、綸旨獲得をよりスムーズに達成しようとしたのであろう。そして何より、立政寺が延徳二年というタイミングで勅願寺となったことも、西山派全体の興隆という文脈の中で位置づけられるのである。

第三節 寺格の確立

— 延徳二年以降の立政寺による綸旨獲得 —

以上のような過程を経て、延徳二年、勅願寺綸旨は獲得された。これを契機として、以後立政寺は次に示すようにたびたび綸旨を申請・受給するようになる。それらの綸旨の性格を、天文二年（一五三三）に発給された後奈良天皇綸旨を素材として確認しておく。

【史料3】「後奈良天皇綸旨」（立政寺文書117）

美濃国市橋庄立政寺事、令弘通浄土宗、宜致御祈禱之由、
天氣所候也、悉之、以状、

天文二年二月三日

右中将（左衛門尉）
（花押）

真海上人御房

【表①】16世紀以前に西山派寺院に発給された勅願寺論旨一覧

No	元号	西暦	月日	典拠	文書	知所	寺院名	所在国	内容	備考
参考	明徳1	1300	7月24日	史料纂集「西福寺文書」	崇光上皇院宣	良如御房	西福寺	越前	崇光院、同寺を「御祈願所」とし、「浄土一宗之紹隆」を専らにさせる。	文安2年3月10日付後花園天皇論旨のいう「明徳院宣」とは本文書を指す。
1	永享6	1434	9月5日	正覚寺文書〔愛知県史〕資料編9中世2)	後花園天皇論旨序	融伝上人御房	正覚寺	尾張	同寺を「勅願之淨刹」とし、折轉を命じる。	本文書、検討の余地あり。
2	文安2	1445	3月11日	史料纂集「西福寺文書」	後花園天皇論旨	浄華院長老聖深上人御房	西福寺	越前	同寺を「御祈願所」とし、「明徳院宣」に任せて寺額を改称する。	文言に不審の点あり。偽文書か。
3	宝徳3	1451	3月18日	法蔵寺文書〔愛知県史〕資料編10中世3)	後花園天皇論旨序	暢光上人御房	法蔵寺	三河	同寺が「文武天皇勅願而、行基大菩薩所奉興聖八百年」の出緒を有する寺院であることを挙げ、更に「開通勝利觀音之靈心殊勝」であることを述べ、折轉を命じる。	同寺を「勅願所」とする天正二年六月付「織田信長禁制」(法蔵寺文書)「新修岡崎市史史料編」古代・中世)「新」のことから、少なくともこの時期以前には成立していた可能性が高い。
4	文明4	1472	10月14日	善恵寺文書〔岐阜県史〕史料編古代・中世1)	後土御門天皇論旨	圓海上人御房	善恵寺	美濃	同寺を「勅願寺」とする。	
5	文明8	1476	6月27日	佛陀寺文書〔大日本史料〕8-8-9(12)	後土御門天皇論旨	邦謙上人御房	佛陀寺	山城	同寺が「勅願所」であることを挙げ、西山問答の法流を相承せしめ、聖祚を祈らる。	
6	文明8	1476	10月5日	蘆山寺文書〔大日本史料〕8-9-95)	後土御門天皇論旨	蘆山寺長老上人御房	蘆山寺	山城	同寺を「御祈願所」として国家の護持を致さしめ、伽藍の紹隆を全うさせる。	勅願寺申請の申状あり。
7	延徳2	1490	12月9日	立政寺文書、実隆公記、同日記延徳2年冬紙背文書〔大日本史料〕8-10-43)	後土御門天皇論旨	護海上人	立政寺	美濃	江南院(龍潭)〔甘露寺親長弟)の所望により、「御祈願所」の勅あり。よって美濃国市橋庄立政寺をして浄土宗を弘通せしめ、御祈禱を命じる。	「実隆公記」同年同日条によれば、永徳2年、応永5年に市橋庄の親主である二条家よりの御教書により、折轉が命ぜられる。
参考	永正10	1513	5月2日	「元長卿記」永正10年5月2日条			瑞光寺	美濃	瑞光寺住持某、甘露寺元長に頼り、同寺を「勅願寺」にすることを請う。	
参考	永正18	1521	7月3日	誓願寺文書〔東京大学史料編纂所探訪マイトロコ〕	後柏原天皇論旨	誓願寺宗清上人御房	誓願寺	山城	同寺を「武家嚴重下知」に任せて、再興を命じ、「勅願誓願」を守らせる。	
参考	大永元	1521	10月7日	立政寺文書〔岐阜県史〕史料編古代・中世1)	後柏原天皇論旨	秀海上人	立政寺	美濃	「美濃國市橋庄立政寺」に浄土宗の弘通を命じ、祈禱を行わせる。	本稿参照。
参考	大永5	1525	閏11月3日	東京大学史料編纂所架越写真帳「東山御史庫所蔵史料」勅封352-9-1-1-31)	待者宗英言上状		灌音寺	長門	「長州通音寺」が「住古以来、勅願寺」である事を挙げ、近住上卿に及んだ尊舎の更調を求めた。【如法規をいはず違ひの功を遂げ、必御沾願隆のさだを請う。へき山、被成下 論旨】を請う。	
8	大永8	1528	5月25日	祐福寺文書〔愛知県史〕資料編10中世3)、「御母殿の上の日記」大永8年5月25日条	後奈良天皇論旨	当寺住持上人	祐福寺	尾張	同寺を「勅願之淨刹」とする。	同寺を「御祈願所」と表記する明応5年11月1日付將軍足利義高御判御教書あり。

参考	享祿4	1531	5月25日	『御湯殿の上の日記』 享祿4年5月25日条		立政寺	美濃	立政寺より繪旨亮給申請あり。同寺が「もともとよりの勸願寺」であることを挙げる。	本稿参照。
参考	天文2	1533	2月3日	立政寺文書〔「後史」資料編古代・中世1〕	後奈良天皇繪旨	立政寺	美濃	「美濃國市橋庄立政寺」に浄土宗の弘通を命じ、祈禱を行わせる。	本稿参照。
9	天文10	1541	3月25日	曼荼羅寺文書〔「後知見史」資料編10世紀3〕「御湯殿の上の日記」天文10年3月24日条	後奈良天皇繪旨	曼荼羅寺	尾張	同寺を「勸願寺」とし、自今以後代々の香衣の着用に勸許する。	同寺住持、慈美へ御礼に参り天皇と対面し、1000疋、御衣、香箱などを献上することが、同日付けの女房奉書、「御湯殿の上の日記」に見える。
参考	天文17	1548	10月27日	光明寺文書〔「長岡京市史」資料編2〕	後奈良天皇女房奉書	栗生光明寺	山城	同寺が「なにことなるちよくくわんしよ（異子他勸願所）であることを挙げ、たよりうきまつきしゆつせの事（当流儀未寺事）」に関する執申権を保証する。	また同寺八幡宮、龜山八幡宮の祭りに際し、本文書と同日付の繪旨が梅意上人御房に下される。
10	永祿5	1562	5月25日	赤間神宮文書〔「山口県史」史料編中世4〕	正親町天皇繪旨	阿弥陀寺	長門	同寺が「異子他為勸願寺久分西山一派」であることを挙げ、寺祖を安堵する。	
11	永祿8	1565	正月16日	『言経卿日記』永祿9年正月16日条、東京大学史料編纂所所蔵写真帳「誓願寺文書」	正親町天皇繪旨案	誓願寺	山城	同寺が「為古住勸願之淨刹」であることとを挙げ、門福寺・三福寺のいずれの末寺でもないことを定める。	
12	永祿11	1568	5月23日	總持寺文書〔史料編本〕永祿11年5月23日条	正親町天皇繪旨案	總持寺	紀伊	同寺を「以里愚」で勸願寺とする。	
参考	永祿12	1569	正月17日	清和院文書〔「大日本史料」10-1-813〕	正親町天皇女房奉書	清和院	山城	同寺が「たにことなるちよくくわん所（異子他勸願所）」であることを以て、寺祖を安堵する。	
13	元亀4	1573	5月19日	東京大学史料編纂所所蔵「繪旨」（正親町本・24-301）	正親町天皇繪旨案	誓願寺	山城	同寺が「勸願異子他」であることを挙げ、諸國の奉加を以て同寺を再造させる。	
14	天正3	1575	12月3日	三針寺文書（東大史料編纂所所蔵、影写本）	正親町天皇繪旨	三針寺	山城	同寺領である菩提園・常念庵が「勸願井上入道命入道蓮生御願異子他浄場」であることとを挙げ、その奥儀を興さし、西山語読許付使中への助力を申し付ける。	天文年間と思われる東京大学史料編纂所所蔵写真帳「東山御文庫所蔵史料」勸封50乙・21～23「所収の西山三針寺大衆群議言上求に三針寺領が「異子他」没収を難し、返付を要求していることが見える。
15	天正3	1575	12月23日	東京大学史料編纂所所蔵写真帳「東山御文庫所蔵史料、勸封53乙・9-32～72」	正親町天皇繪旨	遣迎院	山城	同寺が「異子他勸願所」であることを挙げ、「先年以奉書之節目」で勸進を以て同寺を修造させる。	同寺はこれ以前に勸願寺となっていたと思われる。
16	天正7	1579	2月20日	清浄華院文書〔「京都浄土宗寺院文書」〕	正親町天皇繪旨	清浄華院	山城	同寺「勸願所」浄花院の塔頭である無量壽院を「勸願所」にせんことを誂い、これを拒否される。	

戦国期における勸願寺由緒の形成と展開（桐田）

一見して明らかのように、その文言は【史料1】cと一言一句違わない。延徳二年、かかる文言を有する綸旨が勅願寺綸旨とされたことからすれば、これらにもまずは勅願寺綸旨としての性格が認められよう。次に挙げるのは、この綸旨の申請・発給過程をうかがうことのできる禁裏女房の記録である。

【史料4】『御湯殿の上の日記』天文二年二月二日条

二日（中略）みの、国立政寺真海、上人号申て御草子かみ三十帖代百疋まいる、しん上申、（延徳）ゑんとく二年にもかやうにありたるとて、上らんの案けさんに入る、頭中將におほせらるゝ、

綸旨の申請に際し、【史料1】cの案文が提出されている。大永元年（一五二二）に当時立政寺の住持であった秀海に宛て発給された綸旨も同一の文言を有することから（立政寺文書116）、立政寺が勅願寺となつて以降、申請の際に先例とされたのは【史料1】cであり、文言もこれに倣つたと言える。

では、立政寺がたびたび綸旨を申請する背景には、いかなる事情があるのだろうか。

【史料5】『御湯殿の上の日記』享祿四年五月二十五日条

みの、（美濃国）くに立政寺よりりんしの事申うけたきよし申て、いたさるゝ、御れいにもりした卅てう進上、もとくよりの勅願寺なり、（江幸申長）かんろしとり申、

享祿四年（一五三二）、立政寺住持となつた喜朗は、同年五月、朝廷に何らかの綸旨を申請した。その内容は定かではないが、時期的に大永元年綸旨・【史料3】の中間に位置することから考えても、これらと同文言の綸旨であつたと考えられる。また、大永元年綸旨・【史料3】の発給の時期も住持の交替時期と重なることから、立政寺は延徳二年の勅願寺綸旨獲得以降、住持の交替ごとに綸旨を申請、獲得するようになったと言える。

立政寺が住持の代替わりごとに綸旨を求めたのは、【史料4】にあるように、住持への上人号宣下を重要視したためであろう。住持の交替に伴つて、上人号宣下が申請されることはしばしば見られる。ただし、勝野隆信氏も述べているように、「綸旨の宛名に上人号を用いることをもつて、その内容の如何にか、わらず、これを「上人号宣下」とした」のである以上、上人号の問題と綸旨の内容とは区別すべきであろう。

このような住持の交替ごとに勅願寺綸旨の発給、上人号宣下が行われるに至る嚆矢となつたのが、先述したように延徳二年の勅願寺綸旨の獲得であつた。【史料5】には、立政寺が「もとくよりの勅願寺」であることが注記されている。『御湯殿の上の日記』の記主をしてかく言わしめたのは、他ならぬ立政寺であろう。立政寺は【史料1】cの綸旨をもつて「もとくよりの勅願寺」であると主張することで、住持の交替ごとに綸

【表②】「立政寺縁起」、二通の「伝後小松天皇綸旨」成立の経過

永徳 2 (1382)	智通に祈祷を命じる摂家御教書発給→朝廷・立政寺の双方が上人号綸旨と同様の位置づけ
延徳 2 (1490)	江南院の執申により勅願寺綸旨を獲得→この段階で初めて勅願寺となる
(この間)	代替わりの勅願寺綸旨の獲得により立政寺の寺格が固定化
	勅願寺綸旨の獲得を契機とし、他の西山派寺院の勅願寺化の影響も受け、これまで整備されてこなかった寺伝が整えられ、「立政寺縁起」が、ほぼ同時に伝後小松天皇綸旨が成立。
	立政寺で縁起のテキストが失われる。
天文 5 (1536)	真海が末寺である慈恩寺で「立政寺縁起」の写本を発見→現行のテキスト

旨を獲得し、かつ勅願寺としての寺格をより強固にしようとしたと考えられる。

ここで本章の内容を整理しておこう。延徳二年、立政寺は初めて勅願寺綸旨を申請・受給し、勅願寺となった。これは善空の三鈷寺をはじめ、西山派全体の興隆の中で位置づけられるべき寺格獲得運動であった。以後、立政寺は天文二年までに三通の勅願寺綸旨を受給し、その寺格の固定化を図るとともに、「もとくよりの勅願寺」という由緒を確立するに至った（表②参照）。

第二章 「立政寺縁起」と二通の伝後小松天皇綸旨の成立

第一節 「立政寺縁起」にみる勅願寺由緒

寛正五年（一四六四）、立政寺の住持である真空は「厳重護持」されてきた「彼綸旨并頂戴之重宝・二条殿御寄付之品并御教書之類」などを後世に伝えるために、立政寺の「大略」を記したという（後掲【史料 6】H）。次に掲げる「立政寺縁起」がそれである。⁽²⁸⁾ このため同縁起には、立政寺に伝来する文書が多く取り入れられ、その由緒が語られている。本章では、「立政寺縁起」を中心に、天皇・朝廷由緒がどのような文脈で、方法で語られているかを確認し、前章で検討した同寺の勅願寺化との関係を明らかにする。

【史料6】「立政寺縁起」〔岐阜県史 史料編 古代・中世二〕

所収

〔編者、別筆〕
「真空上人之記」

A. 勅願所亀甲山護国院立政寺開山

智通大士、嘗為弘伝浄教、越関東時、始來此地、以有西庄之名所應、自誓埋杖、果知有縁地、而祈大神宮、□□神勅、文和二年、遂宮一字、名根本庵、為念仏三□□、

①

〔別筆〕

B. 後光厳院文和三年、依関白良基公之執奏、於当国小嶋里、

始奉拜天顔、辱蒙北朝御勝利、政務成立、可令御祈禱之綸言、賜御持念伍大力菩薩画像、(中略)、文和三年、勅賜立政之寺号、上人参内、始奉岩苔并国紙、是便表祝君之代千代之歌旨也、亦二条殿、同献之、此時蒙堂塔建立之免許(中略)故御免建立之寺也、聊不可為輕忽者也、(中略)

C. 同時源義熙・藤種一等、近隣豪族、聞勅許建立之由、各

戮力資益興隆者数多、其証状等可見之、(中略)

②

〔永應三年〕

D. 同年八月、帝御不予、勅使賜御祈禱之綸旨、上人参内、奉

御祈禱、未滿七日、御悩速愈、法験既顯、(中略)

E. 後小松院至徳三年三月五日、勅賜立政寺代々香衣檀林御祈

禱所之綸旨、上人参内、献上如先規也、(中略)

F. 明徳二年五月十八日、勅賜常紫衣檀林御祈禱所之綸旨、同

月廿二日、上人参内、献上如先規也、二条殿御執奏、而任

大和尚位也、此時賜紫衣・九条袈裟・同五条念珠・菊金御紋、仰曰、前来之御禱甚有験、故為法門弘道之、宝祚延長御祈禱、不可怠之旨、天氣也、亦賜亀甲山護国院之号、則

G. 師嗣公之御染筆也、御書在之、(中略)

G.

同年八月二日、勅賜菩薩之号、是乃師嗣公御執奏也、綸旨

并御教書、皆以不可為疎略焉、其後住持参内、并二条殿参殿有之、其外当国諸家之寄附等、具如別記可知、(中略)亦良基公同受戒、為師範之躰、至滅後、亦勅賜菩薩之嘉称焉、彼綸旨并頂戴之重宝・二条殿御寄付之品并御教書之類・上人述作鈔・亦寺法御定式等、代々伝来、而嚴重護持之、于

H.

今現在、故後世為令伝上人法沢者、得仰信依憑、在世之奇事、大略記之、仏子久随從良通上人、相承浄土法、而後参内住当寺、寛正五年甲申年九月十五日、為所化講説觀經御疏畢、修仁王般若会、奉祈念宝祚延長、仏法弘通、之日、又仰三宝之大慈悲弟子等、奉祈信心増進、往生浄土者也、

南無阿弥陀仏 沙門真空敬白

I.

通源上人三門之記曰、当寺者、後小松院勅許常紫衣之檀林、歷朝帝王之御祈禱所也、依之被定西山流相承之一本寺、任大和尚位、准親王格、御免在之、一国無双之淨利也、故隣郷諸大家、傾志合力、興隆当寺、然先師参内、願二条殿之執奏、雖蒙三門建立之免許、不得果而入寂、故予次其志、

以奉造立之而、具見別記充彼所願云々、余事者、
于時寛正五年甲申九月十五日日没之刻也、

觀經疏正宗分也、

(以下、異筆)

J. 此一篇者、真空上人自筆之記也、予於慈恩寺得古写本、未
有此記、実以為奇異、而其本多紛失、雖無全部、而以此有
記、即為什宝也、然古如斯備足、惜哉、今有所闕者、応仁
年中焼失故歟、於中御定式並別記者、雖其写有、唯菩薩号
之繪旨者、本書与写共失、甚所悲嘆也、爾則今現存者、善
令護持、亦無失焉、是則為令法久住、利樂有情也乎、于時
天文五年二月沙門真海謹誌、

A を見ると縁起の冒頭、同寺が「勅願所」であることが真つ
先に挙げられている。これは勅願寺由緒の主張が縁起の大きな
テーマとなっていることを暗示している。

B に及んで初めて、天皇との具体的な関係が主張される。文
和三年（一三五四）、同寺住持の智通は、南朝の京都侵攻を避
け美濃国へと逃れた後光厳天皇に二条良基を通して拝謁し、北
朝の勝利などの祈禱を依頼され、五大力菩薩画像を賜ったとい
う（傍線部①）。しかし、良基が帰洛後に作成した仮名日記『小
鳥のすさみ』（美濃国小鳥の後光厳天皇行宮への参仕から京都

への帰還までを綴る）によれば、後光厳天皇の一行が立政寺に
立ち寄った形跡はない。⁽²⁹⁾

また、立政寺の創建をめぐる言説も興味深い。関東から美濃
国へと到った立政寺開山智通は文和二年、「一字」を建て「根
本庵」としたという【史料6】A傍線部）。しかし、立政寺に
伝来する絵画銘文や聖教などからその創建時期を検討した井上
慶龍氏によれば、立政寺の開創時期は縁起のいう文和二年より
も遡り、建武五年（一三三八）から貞和二年（一三四六）年ご
ろであるという⁽³⁰⁾。かかる草創由緒の改変は、いかなる意図によ
るものなのか。

B 傍線部②によれば、先の後光厳天皇への拝謁の際に「立政」
の寺号を天皇から与えられ、併せて良基の奏上により天皇から
「堂塔建立之免許」を蒙ったという。このように同縁起では、
立政寺が文和三年に勅免により建立された勅願寺となったこと
としている。おそらく立政寺はその草創を実際よりも遅らせるこ
とで、後光厳天皇の美濃遷幸と関連付け、同寺の歴史の幕開け
を天皇由緒で荘厳し、西山派内でいち早く勅願寺となったこと
を主張しようとしたのであろう。

次に、C について検討する。ここでは、立政寺が源義熙、小
野種一ら「近隣豪族」からの寄進を受けてきたことを挙げる。
縁起によれば、彼らは「勅許建立之由」を聞いて土地を寄進し

戦国期における勅願寺由緒の形成と展開（桐田）

たという。しかし、同寺に伝わる彼らの寄進状からはかかる寄進理由は看取できない。⁽³¹⁾ 立政寺は在地領主による土地の寄進を「勅許建立」を聞きつけた結果と位置づけ、それらを勅願寺由緒に収斂させることで、縁起の冒頭で述べられている「勅願所」としての寺格の高さを演出しようとしたと思われる。換言すれば、寺側があるべき勅願寺像を創出し、主張したと言えよう。

第二節 二通の伝後小松天皇繪旨をめぐる

DからGにかけて、繪旨を受給したとの主張が見られる。本節では、これらの記述に対応する繪旨について検討を加えていく。

Dには、永徳二年（一三八二）八月、後小松天皇が病に陥り、智通は「御祈禱之繪旨」を賜ったとある。年号および内容から、【史料1】aの二条良基家御教書がこれに対応すると思われる。先述のように、受給直後から【史料1】aは、通常繪旨で行われる上人号宣下の際に発給された文書として認識されている。⁽³²⁾ しかし、ここでは一步踏み込んで、これを「御祈禱之繪旨」と位置づけなおしている。これも、同寺の支援者である二条家との関係ではなく、あくまでも天皇とのそれを強調しようという、立政寺による天皇・朝廷由緒の演出の一環であろう。

次に、Eについて見ておこう。至徳三年（一三八六）三月、立政寺住持代々が香衣を賜り、同寺を「御祈禱所」とする繪旨

が下ったという。今、立政寺に後小松天皇繪旨として伝わる次の史料が、これに対応すると考えられる（写真①参照）。

【史料7】「伝後小松天皇繪旨」（立政寺文書112）

智通上人御房

美濃国市橋庄立政寺住持之事、代々著黄衣、令弘通浄土宗、

宜致御祈禱之由、天氣所候也、悉之、以状、

至徳三年三月五日

右少弁（花押）

本文書の真偽は後述する。ここでは、縁起の内容との異同について指摘しておく。【史料7】には縁起に見える「御祈禱所」を示す文言が含まれておらず、代わって、浄土宗の弘通が命じられている。かかる異同は次に示す、紫衣着用勅許についての史料でも看取される。

Fには、明徳二年（一三九二）五月、常紫衣を賜り、至徳三年の場合と同じく、同寺を「御祈禱所」とする繪旨が下ったとある。この内容に対応する史料が、【史料7】と同じく、後小松天皇繪旨と伝えられる文書である（写真②参照）。

【史料8】「伝後小松天皇繪旨」（立政寺文書113）

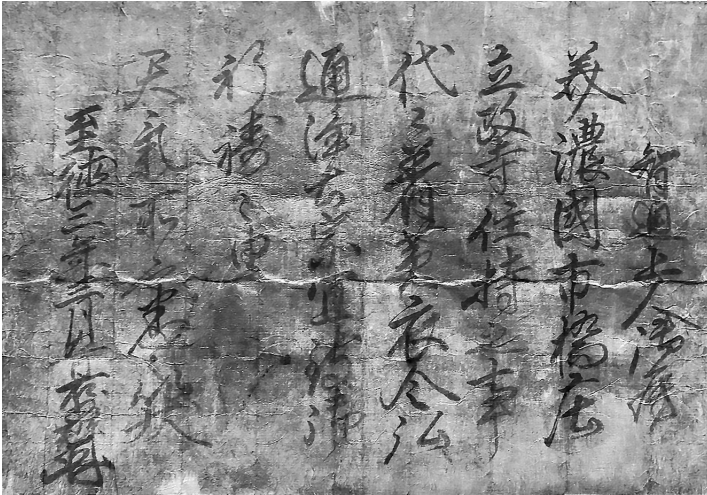
智通上人御房

美濃国市橋庄立政寺住持之事、代々著紫衣、令弘通浄土宗、宜致御祈禱之由、天氣所候也、悉之、以状、

明徳二年五月十八日

右中将（花押）

写真①【史料7】「伝後小松天皇綸旨」（筆者撮影）



写真②【史料8】「伝後小松天皇綸旨」（筆者撮影）



まず、これら二通の綸旨の真偽について述べる。宇高氏はこの綸旨にある紫衣着用勅許を、西山派本山である禪林寺や粟生光明寺に先行する史料として評価しているが、今から述べるようにこれらの綸旨は偽文書と見るべきであろう。まず疑わしい点は、二通とも宛所が文書の袖にあることである。さらに、奉者が異なるにも関わらず、筆跡が同じであることも疑問である（写真①・②参照）。これらから、この二通は偽文書であると判断できる。また、二通とも料紙には宿紙が使用されているが、文書様式が不自然であり、朝廷で作成された文書ではなく、立政寺で作成されたものと見てよいだろう。

次に、綸旨の文言、縁起における位置づけ等から、その作成時期について検討する。【史料7・8】は至徳三年、明徳二年と南北朝期の年紀を有する綸旨であるにもかかわらず、延徳二年の勅願寺綸旨申請時の「旧案」には含まれていない（【史料1】）。したがって、この時点ではまだ存在していなかったと考えてよい。さらに【史料7・8】の傍線部の文言は、【史料1】cや【史料3】と全く同一である。したがって、【史料7・8】は【史料1】c以来受給してきた勅願寺綸旨を踏まえて作成されたと考えられる。そのため、【史料1】c・【史料3】と同様、文言のみに注目した場合、単に立政寺に対する浄土宗の弘通命令であると理解されるべきであるにもかかわらず、縁起では勅

願寺とする綸旨として理解されている（【史料6】E・F・I）。これら二通の伝後小松天皇綸旨もまた、勅願寺綸旨と位置づけられたと言える。

では、【史料7・8】はいつ頃成立したのだろうか。その手掛かりとなるのが、Gに見える菩薩号宣下の綸旨である。J傍線部によれば、現在伝来している「立政寺縁起」が書写された天文五年（一五三六）の段階で、既にその正文・写ともに紛失していたという。つまり、裏を返せば、他の記載文書に関しては正文（と位置付けられた偽文書も含む）もしくはその写が存在していたことになる。

したがって【史料7・8】の作成時期は、初めて勅願寺綸旨を受給した延徳二年から、縁起が書写された天文五年の間と推定できる。とすれば、「立政寺縁起」も、【史料1】以降しか存在し得ない【史料7・8】についての言及があることから、その成立は綸旨とほぼ同時期であると推測し得る。

第三節 立政寺による縁起・偽綸旨作成の目的

ではなぜ、立政寺は縁起と二通の偽綸旨を作成しなくてはならなかったのか。本節ではその目的及び背景を明らかにする。

縁起の終結部分にあたるIには、二通の綸旨によりもたらされた由緒が、立政寺でどのように位置づけられたのが示されている。傍線部①によれば、同寺が「後小松院勅許常紫衣之檀

林・歴朝帝王之御祈祷所」であるために「西山流相承之一本寺」に定められたという。さらに、住持が大和尚位に就くことを挙げ、同寺が「一国無双之淨刹」であると主張する。また傍線部②によれば、前住の時代に三門建立の勅許を得たが、果たせずして入寂したという。この縁起は、住持である真空が先師の志を継承し三門造営を成功させんと祈願することをもって締めくくられている。このことから、縁起作成の第一義的目的が三門建立にあることがわかる。

また、高橋慎一朗氏が指摘するように、立政寺は創建当初から戦国期にかけて末寺の形成に積極的であった。³⁵⁾次に挙げるのは、応永五年（一三九八）に智通が記した置文の写である。

【史料9】「智通掟書写」（立政寺文書114）

定 立政寺

西谷一流於末代相承人<sup>可意得
条々事</sup>

- 一、於本寺不至積功学位者、不可有聖教披見事、
- 一、破戒無慙人名不淨僧、聖教并血脉不可有相伝事、
- 一、破戒人有聖教談者、其聖教本寺江取返、門中可撥撫事、
- 一、学文成就人者、早他国江行、可有弘通利益事、
- 一、本寺有破壊者、末寺同心可致修造事、
- 一、於聖教者、不可有他門外見事、
- 一、本寺末寺、如水魚、可仏法興隆事、

戦国期における勅願寺由緒の形成と展開（桐田）

- 一、於修学人者、囲碁・将碁・鞠・連歌一切諸芸可有停止事、
- 一、於所化者、不可為他宿事、

右此条々、能々守、可有仏法弘通旨、如件、

応永五年卯月三日 立政寺

智通在判

写也

傍線部で智通は、立政寺が破壊された場合には、末寺がその修造事業に協力するよう定めている。この場合、立政寺そのものが破壊されたわけではないが、先師の代から続く三門建立という難事業の遂行に際して、同寺が末寺に協力を求めることは容易に想像される。その他、聖教の閲覧に関しても様々な制約を設け、本末の別を明らかにしている。このように、その展開領域は定かではないが、立政寺は少なくとも十四世紀末の段階で、すでに本寺としての地位を確立していたと言える。

立政寺はその末寺との決定的な性格差を担保し、三門建立に協力させるために、天皇・朝廷由緒を創出し、在地領主からの寄進を「勅許建立」によるものと位置づけるなど、その「効果」を演出した。さらにはそれらを強化するため、紫衣・香衣着用勅許の偽繪旨を必要とし、「西山流相承之一本寺」「一国無双之淨刹」であることを主張したのではあるまいか。このように、本縁起ならびに二通の偽繪旨は、三門建立のために、立政寺の

卓越した寺格を担保する目的で作成・主張されたといえる。

第四節 偽繪旨の年紀をめぐる

ここで一つの疑念が生じる。十四世紀末以来組織してきた末寺に向けて作成されたのであれば、なぜ勅願寺由緒を南北朝期まで遡及させる必要があったのだろうか。

史料の制約もあって、あくまでも推測の域を出ないが、先述のように十五世紀後半から西山派寺院の多くが勅願寺となっていることがその背景にあるように思われる。特に濃尾地域では、立政寺と同じく西谷流の善恵寺・裕福寺・正覚寺・曼陀羅寺の諸寺が相次いで勅願寺となっている（表①参照）。

またこのうち善恵寺では、早く平岡定海氏が紹介しているように、文明四年（一四七二）の勅願寺繪旨獲得直後の文明七年、次のような掟が定められた。

【史料10】「善恵寺入院次第注文」（善恵寺文書7『岐阜県史料編 古代・中世1』）

〔美濃国解脫山善恵寺入院次第注文（編纂者）文明七年四月廿五日〕

濃州解脫山善恵寺入院次第第

一新命令入堂、仏殿の左座繩可有著座、但前住ハ、右の畳に可被座、

一番に四替讀録をつらるへし、惣禮の三の日にて、当住令焼香、繪旨を自侍者可被請取、

一其後、繪旨を侍者請取、維那に可渡、新命も維那も、繪旨可被読之間、可被立、

一繪旨読畢本座に著して散化可有、後唄、

一後唄畢て聲を三打て、各可有退散者也、

住持の入院に際し、勅願寺繪旨を奉読する儀式を行っている。住持入院という周囲の耳目を集める場で、敢えて勅願寺由緒を確認する儀礼を行っている同流の寺院が近くにあれば、立政寺としても意識しないわけにはいかないだろう。

立政寺は、周辺の西山派寺院が次々に勅願寺となる中、他寺よりも卓越した由緒を誇示する必要があった。そのため、延徳二年に獲得した勅願寺という天皇・朝廷由緒で荘嚴された寺格に沿う形で、それを実際よりも遡及させ、さらには紫衣着用の由緒をも創出し、南北朝期以来の本末関係を説く必要があったと考えられるのである。

おわりに

最後に、勅願寺繪旨（とされた偽繪旨も含む）と勅願寺由緒との関係を今回示した立政寺の事例に基づき、まとめておく。

立政寺における勅願寺由緒の主張・展開の核には、延徳二年の勅願寺繪旨の獲得という事実があった。その後、立政寺は住

持の交替ごとに勅願寺繪旨を獲得し寺格の固定化を図る。また、十四世紀末には法流に基づいた本末関係の構築を完了していた立政寺は、縁起に見えるように、勅願寺となることで末寺に対する寺格の優位性を担保しようとしたと考えられる。その背景には、他の濃尾地域の西山派寺院の勅願寺化の動向があった。こうした他寺への意識が、勅願寺由緒を実際に本末関係が構築された十四世紀末へと遡及させることになり、二通の偽繪旨が生み出された。

ここで強調しておきたいのは、勅願寺繪旨が果たした役割はあくまで寺格の担保にとどまったことである。勅願寺由緒によって、本寺としての寺格が確立したわけではない。そうした「効果」があたかも存在するかのように見えるのは、寺側の演出によるものに他ならない。

寺側によって繪旨が縁起等に組み込まれる過程で、寺格主張等の素材としての位置づけが与えられる。そして、核となる史実を基にして、内容の如何に関わらず、寺側の意図するところに従って由緒が創出され、展開してゆくのである。

このように立政寺の場合、勅願寺繪旨の性格を定位するのはあくまでも寺側であった。寺側の積極的な働きかけがあつて初めて、勅願寺繪旨は由緒主張の材料として機能するのである。勅願寺となることのメリット、すなわち勅願寺の「効果」を探

るには、寺側がいかなる立場で、あるいは文脈で勅願寺由緒を主張したのかを個別事例に即し、慎重に検討していく必要があるだろう。そうした個別事例の蓄積の中で、奥野高廣氏が「中世の天皇制を解く鍵もこの辺にあらう」とその解明の重要性を指摘した³⁸、戦国期勅願寺の実像も次第に明らかになってゆくに相違ない。

〔註〕

- (1) 佐野恵作『皇室と寺院』（明治書院、一九三九年）。
- (2) 辻善之助『日本仏教史 第五卷 中世篇之四』（岩波書店、一九五〇年）。
- (3) 平岡定海「中世の祈願寺の性格について」（『文化史学』一〇号、一九五六年）。
- (4) 例えば、石上英一他編『講座・前近代の天皇』（全五巻）（青木書店、一九九二年～一九九五年）。
- (5) 「戦国期における天皇權威の浮上」上・下（『日本史研究』三四〇・三四一号、一九九〇年・一九九一年。のちに同『天皇と中世文化』（吉川弘文館、二〇〇三年）に改稿の上、所収）。
- (6) 渡邊大門『戦国時代の貧乏天皇』（柏書房、二〇二二年）二二三頁。

(7) 富田正弘「嘉吉の変以後の院宣・繪旨―公武融合政治下の政務と伝奏―」(小川信編『中世古文書の世界』吉川弘文館、一九九一年)。大喜直彦『中世びとの信仰社会史』(法蔵館、二〇一一年) 三六三頁。

(8) 今谷明『戦国大名と天皇―室町幕府の解体と王権の逆襲―』(講談社学術文庫、二〇〇一年、初出一九九二年)。伊藤克己『戦国期の寺院・教団と天皇勅許の資格・称号―紫衣・勅願寺の効果について―』(『歴史評論』五二二号、一九九二年)。

(9) 小森崇弘「文化史研究の課題と戦国期の天皇・公家」(同『戦国期禁裏と公家社会の文化史―後土御門天皇期を中心に―』、小森崇弘君著書刊行委員会、二〇一〇年)。

(10) 宇高良哲「中世浄土宗寺院の一考察―特に美濃立政寺文書を中心に―」(『藤原弘道先生古稀記念史学仏教学論集 乾』同記念会、一九七三年)によれば、同寺の発展は二条家による寄進と在地領主の支持によるものであるという。また、立政寺文書を利用した研究として夙に知られているのが、「壳寄進」についての新たな見解を示した須磨千頼氏の「美濃立政寺文書について―田畠寄進状等の整理と「壳寄進」管見―」(同『莊園の在地構造と経営』吉川弘文館、二〇〇五年、初出一九六九年)

である。この他にも井上慶龍「美濃の西山派」(『西山禅林学報』二二号、一九八八年) などがある。また、近年の高橋慎一朗氏による成果に関しては後述する。

(11) 今泉淑夫『東語西語―室町文化寸描―』(吉川弘文館、一九九四年) 五七頁。

(12) 高橋慎一朗「武家権力と西山派」(同『日本中世の権力と寺院』、吉川弘文館、二〇一六年)。

(13) 立政寺にはこの正文が伝来している(立政寺文書¹¹⁵『岐阜県史料編 古代・中世一』)。

(14) 勅願寺を意味する文言として、勅願寺繪旨にしばしば見られる「御祈願寺(所)」文言がある。以下、この文言と勅願寺との関係について触れておく。

中御門宣秀が職事として発給に関与した繪旨・口宣案などを関連文書とともに書き留めた「宣秀卿御教書案」(科学研究費補助金研究成果報告書 末柄豊『室町・戦国期の符案に関する基礎的研究』、二〇〇六年。以下、『符案』と略称する。)には、延徳四年(一四九二)、河内国交野に所在する光通寺に発給されたに次の繪旨案が見える。

「後土御門天皇繪旨案」(『符案』六二頁)

「光通寺為 勸願寺事」

当寺為 勸願寺、宜令専仏法之巨益、奉祈宝祚之洪

基者、天氣如此、悉之、以狀、

延徳四年三月廿一日

(中御門亮秀)
左少弁判

光通寺住持

源大納言内々伝仰、寺僧為礼
百足持来、河内国キンヤ云々

同寺を「勅願寺」とするという勅願寺繪旨であるが、この繪旨は「宣秀卿御教書案」の紙背文書として伝わる、「東福寺門徒光通寺、御祈願所事」と書かれた申文(折紙)に基づいて発給された(東京大学史料編纂所架蔵写真帳 宮内庁書陵部蔵『宣秀卿海教書案』2〔1〕〔2〕〕。このことから、申請者が「御祈願所」となることを望み、「勅願寺」とする繪旨が下されたことがわかる。

また、寺院側が「勅願寺」となることを所望したのに対し、「御祈願所」とする繪旨が発給されることもあった。文明八年(一四七六)、京都に所在する蘆山寺は同寺を「勅願寺」とするようにと三条西実隆を通して朝廷に請うた(『実隆公記』文明八年十月五日条)。これを受けて、次に掲げる繪旨が発給された。

「後土御門天皇繪旨」(蘆山寺文書『大日本史料』八編九冊九五頁)

当寺事、為御祈願所、宜令致国家之護持、全伽藍之紹興者、天氣如此、仍執達如件、
(平出)

十月五日

(長尾高徳)
左中将(花押)

戦国期における勅願寺由緒の形成と展開(桐田)

蘆山寺長老上人御房

つまり、寺院側も朝廷側も「勅願寺」と「御祈願所」を同義語として理解していた。このことから、勅願寺と「御祈願所」とは同義であると言える。

(15) ある寺院を勅願寺とする繪旨、またはある寺院が勅願寺であることを前提として発給されたことがその繪旨の文言、および他の中世史料から明確に判断できる繪旨を「勅願寺繪旨」と呼称する。

(16) 後述するようにaについては、立政寺に正文が伝来している。

(17) 家永遵嗣「足利義満の公家支配と「室町殿家司」」(同『室町幕府將軍権力の研究』、東京大学日本史研究室、一九九五年)。

(18) 「吉田家日次記」永徳三年六月十九日条(東京大学史料編纂所架蔵謄写本)

十九日(中略) (粟田宮内侍部代)
兼種宿祢申、粟田宮俗別当讓与嫡男兼音事、仰先々 (後行連上)
仙洞御政務之時被下 繪旨之上者、任兼種宿祢讓、不可有相違之由、可書遣繪旨於兼音之由、可仰家房(中略) (兼種)

粟田宮俗別当職事、兼種宿祢讓与之由被聞食畢、不可有相違者、依、 (長尾高徳)
攝政殿御気色執達如件、

永徳三年六月十九日 右少弁判

下総守殿 表書云右少弁家房

- (19) 前掲註(10) 宇高論文。
- (20) 「二条家司芥川平四郎島地渡状」(立政寺文書38)。
- (21) 田辺英夫「本山義の軌跡」(『西山学報』四十一号、一九九三年)。
- (22) 大山喬平「解説」(同編『京都大学文学部博物館の古文書第九輯 浄土宗西山派と三鈷寺文書』、思文閣出版、一九九二年)。
- (23) 「後土御門天皇綸旨」(三鈷寺文書『大日本史料』八編九冊五五三頁)。
- (24) 田辺隆邦「実隆公記に現われた西山教団」(『龍谷史壇』六十四号、一九七一年)。
- (25) 「濃州厚見郡西荘立政寺歴代大年譜」(東京大学史料編纂所架蔵写真帳『立政寺文書四』所収)。
- (26) 前掲註(25) 史料。
- (27) 勝野隆信「上人号宣下考」(高橋隆三先生喜寿記念論集刊行会編『古記録の研究 高橋隆三先生喜寿記念論集』続群書類従完成会、一九七〇年)。
- (28) 後掲【史料6】は、本文とは別筆で端書に「真空上人之記」とあるが、本稿では『岐阜県史 史料編 古代・中世』に從い、史料名を「立政寺縁起」とする。
- (29) 後光厳天皇の美濃潜幸に関しては小川剛生『南北朝の宮廷誌 二条良基の仮名日記』(臨川書店、二〇〇三年)第一講に詳しい。なお、後光厳天皇の美濃潜幸が実際にあったのは文和二年であり、縁起に文和三年とあるのは誤りである。
- (30) 井上慶龍「立政寺の開創について」(『西山学報』二七号、一九七九年)。
- (31) 源義熙の寄進は八件(立政寺文書16・17・18・20・57・58・63・65)、小野種一は五件(立政寺文書56・64・67・68・106)の寄進がそれぞれ確認される。
- (32) 前掲註(20) 史料。
- (33) 「岐阜県史 史料編 古代・中世一」は「後小松天皇綸旨」としているが、後述のように正文とは認めがたいことから、【史料7】【史料8】ともに、本稿では文書名を「伝後小松天皇綸旨」と改めた。
- (34) 前掲註(10) 宇高論文。
- (35) 高橋慎一朗「美濃立政寺に見る末寺形成の一樣相」(同『日本中世の権力と寺院』、吉川弘文館、二〇一六年。初出は一九九八年)。
- (36) 前掲註(3) 平岡論文。

(37) 「後土御門天皇綸旨」(善恵寺文書4『岐阜県史資料編
古代・中世1』)。

濃州善恵寺可為 勅願寺、自今以後、住持代々箸香衣、
可令專御祈禱之由、天氣候所也、仍執達如件、

文明四年十月十四日

左少弁(前出)(花押)

円海上人御房

(38) 奥野高廣『戦国時代の宮廷生活』(続群書類従完成会、
二〇〇四年)二三五頁。

〔付記〕 本稿は平成二十九年七月八日の皇學館大学における
「第十回 皇學館大學人文學會大会」で、口頭報告した内容
に基づくものである。

史料調査、写真撮影、図版掲載等、本稿の作成に当たっ
て多大なる御高配を賜りました立政寺様、ならびに右記研
究会において貴重なご指摘ご教示を頂戴した各位に衷心よ
り御礼申し上げます。

(きりた たかし・

皇學館大学博士前期課程国史学専攻一年)

戦国期における勅願寺由緒の形成と展開(桐田)